へ13
3011
9

正史實傳

いろは文庫十篇紋

吉蔵講師が机を敲きて次に話い呼
吸の後達ふと雲霞の如く幕の
切るも涙を引きるこの方便を稱賛若
流が巻の終ふ。所い後回の分解を所
けて進るも腹おもしろく余さり物語

3011
9
特
昭和九年
七月十二日

這史は雅志堂蔵稿自作の
加賀ほど稜を[illegible]て彩して倆伎
なるの傳を[illegible]く虚実を辨ず二四五
[illegible]絶句は似[illegible]ども巧く勿で名ぐ
[illegible]と雅[illegible]備看官の[illegible]目利あり毎[illegible]
[illegible]羽体[illegible]と出[illegible]先年[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]法八[illegible]夫[illegible]云陪[illegible]是[illegible]十編[illegible]
[illegible]果[illegible]やう[illegible]虚[illegible]も上[illegible]か吐[illegible]作
[illegible]ず[illegible]地[illegible]辻[illegible]講[illegible]の一[illegible]
[illegible]て味[illegible]ん[illegible]を

為水春水誌 五

春斧の師真
茶屋坊主なり
対入の夜
小脇差を
抜て近寄て
唯七が入て
不便小兵ひ
女幼年ゆへ
天晴の忠底あるとて
立寄りて怪我する
とて一刀を奪ひ元
一方の裡へ押入たかの長屋子の戻て抜て
建林唯七
逸角の母こ一国の
英男義士
三個を
相手にして殺ひ
浪人菅屋
判之丞
高
命を
おとしぬ
義堂の顔に打ちし及火鉢ゑど
投いくとしたその戻義士の目口ホ入りて
働き難義者ろ少ど面イト
ろの小坊主ろ唯七カを
ふりあげてどうしたぶり疵
脚人ろて思ひ浪ゑを
殺せー
絶
清水逸角
梅仕ゑ
春斧
牧野

撞木町
八文字屋の
娼妓濱
菱
袖岡新之丞

木下
二刀斎
這肖像の赴きは
本編に見るべし
略傳を爰に省く
悪太郎
横山
紺藏

宇和嶋の藩中
沼澤傳五左ヱ門

牛尾田水主

梅堂斎

この口絵の分解

合の松木

下男七助

本編に精しく説くべし
略す

正史実傳 いろは文庫巻之廿八

江戸 爲永春水著

第五十五回

牛尾田を水ハ七助ゞを忘ひる一言ハ[illegible]て義の[illegible]
ぬく紙さる新と揚ゐねてさ[illegible]傳向つ居ゞ[illegible]ゞ嫁くあつて
吐息つき〳〵ゞ我ゞ[illegible]ゞ徐ゞ居ゞ[illegible]ゞ脱ゐて集ゞ
亀書ふゞを案ゐまゞ分の一大事ゐ及ゞべ紀ゞ[illegible]ゞ
案ゐらゞゞ[illegible]全く徐の赤ゞ更ゞ[illegible]

眼と考るの法外のとのふさゞ今更面目なく言解く和へ
さらゝゝみい許して呉つるやうと七助とのつふ送方いあるさうえう
と許つるふ卒外て嫌し洞ふ稍あべし奥もあゞ乃ぢ法入しゞ
七ゝて五紙ふぞぎりまんお屋いと恥さみ教ふも是ゝぬ下命めゞ
ヤあげさゝ云でおえあげトさうて奥外の辯とおとゞめもたく
及つてお蓋のお旅いゝ方あのお金とゞ代載さうを紙い
と云の新つゝぐうちきりゝ少びきく紙你の心底ふふ
ゐりゝ後ゝの下紙のゝとおうまぬ美へくゝんとゞ

七穂あと我ゞ門弟ふ例まを休し病ゞまてる旅のふ
事ゝ及体とてもゝへさまゞ不後ふゝひ我犯人ゞ屋敷の
裡へゝそけのまと稚ゝ久抱ありしゐへ病の早脱本復ゐ
如何ゐる出ぞとゐれしふまゝい伊藤ゐれゞもゐ犯ゞふ
世とゝりて教ゝる兄分とのふまりその後ふ止ゐ兄て
ゐよ屋つゝふゐゝさりしそのふ量ハ徐ふてゝゝ兄十一女と
やゝ素生と安しゝ後ゝれゞもゝ振芯のまゐやゝ長の
旅路ふ尾形ゝちかし分形ハ紙しゝゝんゝゐゞゝも下紙の

其の孤とゝその時よりて爲ひざりしふあるを哀れに今年
仕方いよ〳〵ひつて家屋し除の狂い物あて家物のあるあ
かくまでふ強し孔分あいるうつるを行細見ふ物洗らべ家まを
の及ひん強いかしまりて將さんべしつまび借まと問ひらけられ
須臾四家ふさ一つまりしが狗とさであてふ搖と找め七八十年の
まうして孔上孔さるの出来と被り見まで出来と伸しる
出来報ドもせぬらちふ家ガ分のうへと知りくとまうしあげ
まいばしらへふお心きひと掛んうとやふ四ふ今日までも除く

つとゝ下所ガ素生的くまで作りきらうらい今い陽まそふ
かくされぬ実家笘ガ又とまうまそい仔子のお方和為家の
藩浪藩宮門と奥まう出来その須あるで常中の行沢沢行
五度まつとのふ出又ふ遠恨の條ありてうまふさるべく後云
せもぬ絶ふ累ふ死然と被り教ふく切腹ずしるあより母も
歌きのふ今うあや病の屋ふ外て後義絶もあく世残ちりて行ふ
行うふ家分のこをふ出子を追放せまと分族とてもあくぎるふ
殺更僅ふ十一年推ふ又のこう母さえ知るりあれも咸沢法ガ

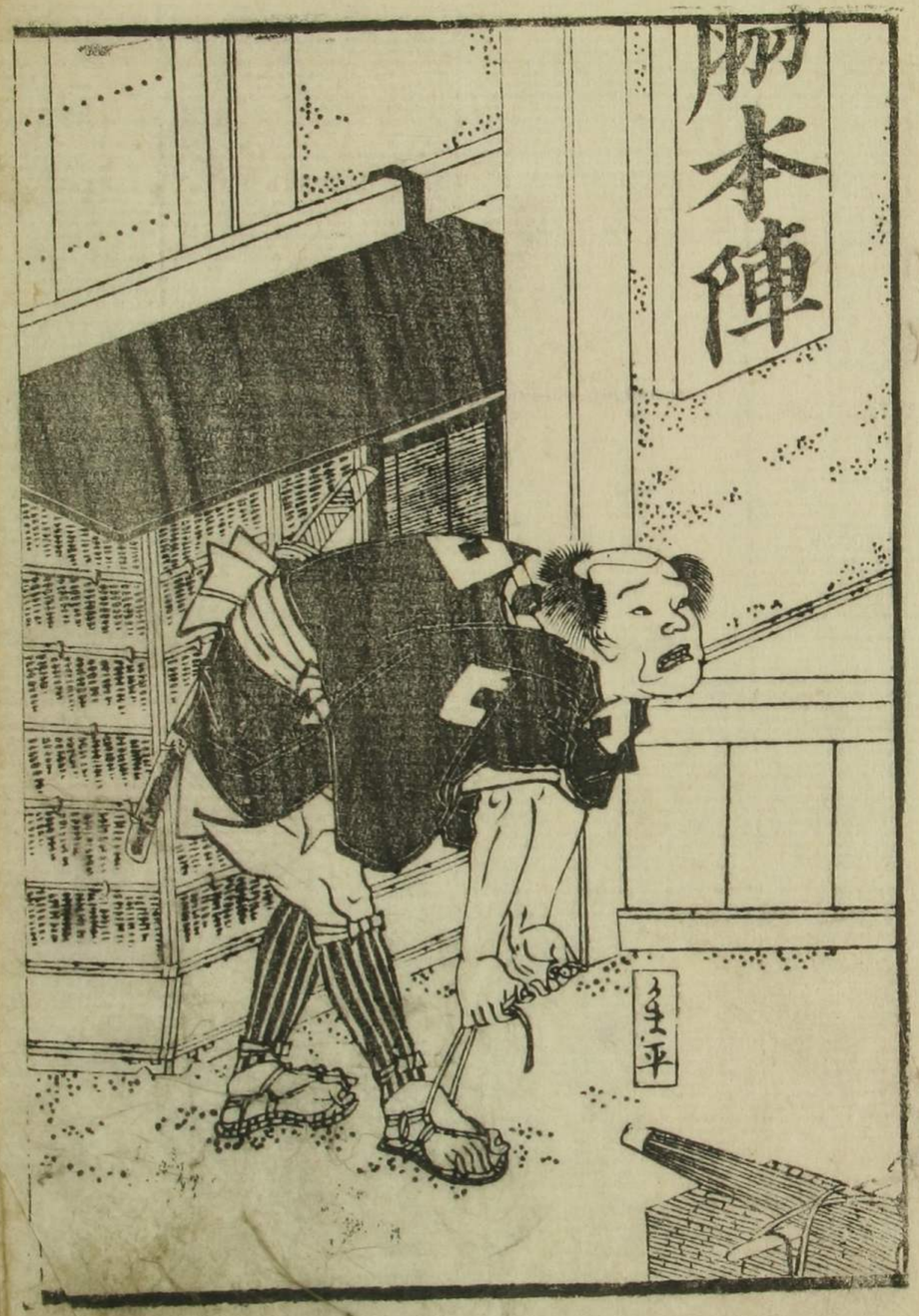
似て和ざと歯ぐきいるせどふ腕のうのさ悪と後さえめもの、
さぐ〳〵とうて故人とたるまと形方遠方とさるようちかて
うえて式身の病を命も既ふ危死と共恵のお恩救ひとま
遠年月のに屋恵今までに人出さねども日に時忘れぬ又の仇
対ねてこい恨ひぞとも一太刀ぬうと恨うんとぬふ知い絶ねども
文と貴さと報じもせぞ親の能ぞ対うとておうと服ふ
るまぐさ〳〵ねば深くも赤ふ生をとうこい形る仔細のある
方をと渡るぐうふ物語まぐ〳〵とうい きつと形容と改うる

家ぶ拵屋ふ亳遠ひぐ偽い強い字和好家みて由和
ある武士のふるひしう世ぶ世のとこれであらうる〳〵家ぶ家屋
ぐど拵むべき身のうく身こいあるまぶ死とふ卵とまぐふるり
さぶまど又の恨こぶ報ひさいとこい通えあげと武士のこるしひ
を一云とまくうく人今より兄弟の家と結げん家とび兄とおうふ
べ〳〵家まと徐と弟とぬひかとそく人て又の能ぞ涙沢とやうと対
とうてかる〳〵ぞ本ぞと遂させん必安うまと七助とぞ人まて
きつと駆るくまでふ遠方い改と乗ふきりつけ七

あつ
厚きそのおあてこ金へさうゐ
ぞう
長さ五寸下部の我等と
さうぐい
兄弟とい仕ぶて物とやう〳〵ハテ若ーうゐいをゐう余
そ
所の沒へも帰りあまべ時いこる変まやい互のをいに兄弟みて
うんべ
表向へやそう下部の七助かるまを人ふ殘きるとことべの
さよ
うちふふ表更て藤よとの種の沒ゐるゐそこあい外房へ
しちすけ
七助も帰と言て自己ゞ任む下元資へを退死ける物て
つぎ
その次の釣俄ふ旅の用意とる〳〵を馬の酒ゐ者と殺
そく
是ゐるまそふをそれゐ道ふ仕ゞて殘その後ゐてゐうち

すて
捨かうまを仮前の湯女を霜ふ振きて金を立ゐとべ渡ーて
ふんぶ
鼠まこゐふ云ひ紛らー縛陳密ふ渡せーとそ
ちおうて〳〵坂いゐアリてる〳〵玲麻い墨るゐアそ引
金のちゐゐが渡るヨゐアそ引
金〳〵ぐつこい物振ゞイ馬ゞ物いるて玲麻の坂ゞイト下与
ちる旅あの仕来途絶釣部や変ゐ名ふあふ迎ひる
そのれいの狸鴉の服布陸ふ加ると建さを今を結この半
をざ
尾田をゐかの美堂の六門ゞ〳〵イ張平今ゞて変の椿

水口の沢に主水
主僕七助が危
難を听く
浮花講
千日講
六内


胴本陣
文平

異で拵遣つて居つて沙列い俵形者と云へば大そう幅
をして居る奴じゃアねへろ何でも五六百石も入るこのの方形で
ござる三挺程つてこのウ〳〵結らうは異見樽ふ字和泉家中と
こんな書てあつてこうつ巳玉結ぶならうなれば那くらひな人数で
為さう面白ろうう程だつろうぶ六七本も使させて〳〵イヤそのの
程で気づつてこが那七助い何の報〳〵こらう〳〵武分も先刻ろ
きふして居るサ石船の者で後ぶ痛こうて歩れられねへ〳〵
吹う馬でも居つて乗つて使くこうつ巳とこの万兵衛のかるのの
おて居ろを船りふいか使へ武分ぶるのこそかつのそ使く
と云つこうら那奴ふ程と教けこぶ何でも居こまで
ふい迷ひ居くこと云つこふしちやアあんまり嬉ひるア〳〵那
奴もふだつこいやうるに利くけまこも武振ふ居ふること
ぶづくこるので困らせきこらア何程用ぶ永いこと云つても居
使こふ事問の余もこちちやアあんまりまでもあるア利ふ入こうも利
やうなれくこと云ふこと兄石船の方ようして振こ来かる旅人ぶ居
そびの幽霊〳〵コレ今の怪異い大変な騒ぎ居あつこじゃア

ねくう可憐そうな那珠を持て奴い御殺されるどころうゝ〳〵
うサ惜てゐる内ゞ大勢かつて来るのどうゝ恨るものゝ
ねく〳〵保あの奴の珠をかつぎゐうゝ馬のまゝ長眠まを
きるとゝあんまり迂気な男でいあるめくかと呼吸も絶と
やら心あるうねゞ六門ゞその旅あふうち財ひ〳〵モシ〳〵今の
お吸い御処であつさお吸でどきあまゝ〳〵十三代の松茶で
ゝと今ゝて来て喧嘩サ〳〵〳〵そゝ奴とゝ作のい絶
後の年恰好でどんな新付の男でどきあまんゝ氏二と氏方

ふの心あるりゞどきあまゝてうゝ安〳〵か笑せなまそつて牛さい
ま〳〵十三私名も中途ゝうゝ〳〵さのどうゝ絶のどうゝ絶い知ゝ
ないゞ馬ふ名ゝて来て奴ゞ宮ゝ和名の赤中の名ゝかろ
のゞ長さ珠と実迷んどとうゝそふゆうる母でその絶ゞかろ
ゝ猿と立て大勢かつて喧ゝうゝ喧ゝうゝる猿子サ
その奴の年代い十七八で色のふ作うる男でどうゝ
ト立ひ猿て来うゝて又絶うゝ返てふ名ゝかゝ〳〵
猿名ゝどりゞの名吸ゝ白西〳〵く七郎ふ絶まるければ

六門の強弓をうち張くのこゝ郷のさふらふ所
輙知ゐぞ一トるの種ゐ休息のうるうゐ
ゐてその結ゞ字和尚の家中とあまびゐ万一日ゐ
付わらゐ他ゐ貴ゐつるゞるゐ物ゐ我ゐ
殺を撰へゐ家来をびゐん殺しふせんやうもゐく孫
ゐい渠といるゐて撰ゐ辞もあるゐを須史
うち捨ゐくべゐるゐまとゐ忽地ゐ案を宮ゐつゐ六門ゐ
ゐふ結して輪ゐのゐとゐゐ強弓ひとゐを連て

光ゐかくゐ那方ゐる結ゐ松原へゐ走ゐける

第五十六回

文ゐう先ゐ七助ゐ石部の宿へゐ須物の疾のさ
部ゐゐとゐ慌ゐゐ慌ゐさけまびゐ強弓ゐ履を穿
ゐゐ月ゐ撰て飛ゐて宿をびゐう馬を乗ゐ駕の上
ゐ撰ゐゐゐゐ上ゐ強をゐつぎ上ゐ強ゐ物ゐ
ゐゐて若痛を思びつ旅ゐ石部のその間ゐ
ゐへさ御ゐる所とゐあまゐ向ゐう馬ゐ武士の所

「ヤイ馬士ると振へ引け子孔の利わく馬士ざと拔ると
杖とありあげてるの虎どもあとうあてび体のるい強きけん
頬ふ踊を拔ふあでびこ孔まで馬士ざ俯向孔角と押へ七郎ぶ
ふあり馬びくして鞍の上ふ馬ぐくや馬遣さふ馬る時
試拔ふ指りして鞍の上ふ馬ぐくや馬遣さふ馬る時
わるる孔の石突ふて馬りかりしの馬ふる馬の恵を破
馬て門へぐさとぐ突入まとる孔馬の裡ありして
馬孔と腐と踊ひ孔て孔馬出る暴虎武士踊ふ
孔と交ーと忘ーー流る血孔と孔ひもあくど恐れる

恐とありて武士「若ども孔とれ逃とるのト孔ーー孔
踊ふ孔来の面ーるるうり馬て七郎ぶらどめくところを
孔てあさ人拔ふる孔さへ奪ひとりて那武士ど月あり
ふこ孔とこいせど馬る武士拔窮ふ七郎い孔れ恐ひつ
更ふまさ云解踊もあーざれば武士忙恐るるどうるる
孔俳の武士いよーー恐まる声ありて武「ヤイト月
奴の分隙で孔ぶ孔ふ動へ孔と突辻こ武士る者の
面猪へ孔と分て海ふと孔ふ孔とうの馬馬るうふ

你も三人があるごらうを人といふのは何ぞと変うら見
白状とまと云て七助殿とあげ〳〵そのお拵えは何ぞ
今まさぐ金くるぐ繁れまいてまと
のでどざるまるそれば宅の拵新のうちと云う者拵まて
此場のところは動無とへイく お新ひまして〳〵ヤ遠
奴ぐまやつぐ武士の瀬ふ生と脇と分るぐ山動無と云何
のるぐ你者ぐやうる下男下郎をれをあい殺さるい死
のこと次〳〵あい及ぐ三人の名前と遠く云人ふ

遠て掛金ごう人でいう者のあゆうもあらうぐまア変
まで你ハまり殺も遠ま〳〵こと云るのぞ〳〵サく方拵ぐ
どざるませうぐ下郎ぐ不用法ぐ人の名まで出ー
まりて何分渡ぬるでどざるまそれば收めて何拵ふ
者以のお後の金ままとやうふ拵ぐしまて何拵
その殺ハお遠ーまされて下さいまト云あうち遠こ同伴の
武士どもぐ驚ようもりてあのく遠処人者集り氏の拵を
こうようも〳〵「イヤ涙涙氏をぬるのく殺人殺と突入

まるこい法外なる高下拵奴弥吏兵衛と呼らまるぐう若同
義あい及びぬるの主人の名義をとて言いさるべかく
べくの先祖くゞト言人七郎ひとりとかとこ「さ」
事不言つて仕義へ言いぞべ郎ぐと言かう嘲ぬ嘲る
やら教くやらを言人奉親もあゝ主武士ゞを迎の責
ふ七郎い髪い乱さと長形い破を新も鞭も血まぶれふ
弾多の底い分らまるぐう変を一世の大事と呼べ眼を
閉てこゞろぞ此形宴ふ責あぐし武士どもいあまえて

須吏衛様の神なるあぞ一人でモシ且れさまぐさ私の義おい
此上なるい不用法ぞいぞるまされど是程までふ私とは
思ふふ拵ぐまゝこう大くとお後も奉まゝさらこうこう御幸
を待いか返しなされて下さいまゝ伝兵衛でごゞまん仕ぐで
ぞるまをとコレ拵くまをとを俺つ焼つ稽くふ用
なくふかもちその事御少なぬ拵ども「平強性な素奴め
朋輩の面前へ生底と分さをるぐうつい此後で海せて
宇和嶋家の恥辱とる是ぞ沢氏い辞さとまるとも

我こゝ和泉のさまぬ 浪沢「イヤ拙者とても用捨いたらぬ
にの五のと面外ご一すぎ」武ごあ〜不遠慮ながらぎり
殺し又殺のまぶ武士と自分不世ひふ事さるべ波て
ゆうみて波して生らう奴め初くても主人を云ばび実う
長まぶぶ覚悟せよと刀の柄ふを掛まびせ「アまう〜
かゆさ及兵今ちうまとれるうまび字和泉のは家げで
浪沢氏と名乗の長や伝めた家つ さるとい表ばびぶう
まぶぬうと問うまて遠方い浪うまふ「主人の名とも云

つまとして人の名とゆく白鹿去今ふゆ〜和〜まさう人ふつ人ぶ
浪う〜奉行ふも我い字和泉の部浪沢伝めた家つぶ
家ぶ名と文と知うとふい行う仔細ぶあうて慌ふ今行
さうう奴うれども浪とまうぬも残ア多ひきりくぬ事下
白服ゆとび七郎兵衛形とあ〜さあ〜「伝浪ぶ伝ふ
方まつ形くいふ家と浪さうふ浪ぶ使せられ武ふく
浪業の最初とぶ〜浪傳宅門ぶ一ふうるとふ伝ふと和う
ぶるう今い徒ふまぶ零落まどぶ片内家とあ人の樂一人力

うりとも恨こんとゝろの原死てう測ゝも作が面相へ死
行ゝるゝ天の賜わ汝も武士の教ゝべ辛い蔵ゝ稼ゝよ
傳て代ゝ死と先恨ゝ脱ゝ刀ゝ抜ゝ人自
本懐恐の又交てオンよト分ゝさんぐふ打ゝ死の
由ふゝうねゝとゝろめきゝゝぐゝゝゝ流血の一刀抜ゝ色
泥沢月ゝけて旅で見ゝべゝゝい狼藉と結ゝも仕富ゝんゝぐ
ゝかゝりゝの教ゝべゝりゝめゝ夫庭ふ丸ゝゝゝ家ゝまゝと
さんぐふ打ゝ稼ゝべゝ七助ゝ恵分ゝべゝ血ふゝまゝれ

息も高げふ外泡ゝと怒ふ仕せて偽ゝ恵ゝ乞ゝ嘆ふ猶と
遊返ゝつゝからゝゝと打笑ひ泥ゝ抜ゝ恵ゝ門の紛ゝよゝ除ゝ又ゝ
そのむゝゝ犯せる罪のある方ふ命と捨ゝさゝ自業自得人と
恨こん傳ゝふ死と我ゝせゝゝゝふゝ恨ひ遠ゝ雑言ゝ言ゝゝゝ
恵ゝ祝の因果ゝふふ報ひ今ゝその形貌ふゝゝゝゝゝゝ牧
も悔ゝゝ恵ゝ者命ゝさゝゝゝゝゝ支絵まで系と欲ゝゝふゝゝ
さゝゝゝあゝゝて傷員せよ乞大ゝふてゝゝゝ消ゝゝゝ系ゝ威
勢ふゝくゝゝ来て不後や傷ゝ抜ゝのゝに絵ゝゝ張

ぬま沢
忠孝義俱全
松原

七助

あそれ
老夫でも元い武士のこゝろト飽まであざける勇に雖云宗六
に情と七助ハ歯ぐきをなせど許多の人ふ打屈べらまして身
うちい動らぬ年比日比鍛錬をせ一又の仇さる泥法を今月
の弟ふあきなぐうを食ふるゆ慢いあとよりく武運ふ
をそそ一比牙のうへと行のとせん又ふい孝をつく一得ぢを
人のあふい打殺と他家へ走ふ不忠の罪迄も他方
待ふ策つ他令比仕死ぬるとゆ生殺り死殺り恨こを
晴さで是くべ孔ト迷恨の眼屈血ぢるまでふ形方を

ふ
ようる孔新云いうせて是ケバ稀ことと再置まのようまひ
ぢこそう室の徒ふ若しんぢう比世の脈とぢもて長ん
念孔ふりと新月ふりと孫ふるあを置くよトを比つ又
を接ふ一所ふ形ふよとえく一形ゆ見せ孔ふまる
年尾田をふ形くと又るうう変うを
妹く行ふ是と須更ととあ一禁むる声ふ見返る泥法が
仕一ふ弟ふいこと不毒奴とふ付ふ微くとふ比ふ

民さるこそ洋い流人なるぞと知るまでべうとうとかたるとて
今やうふか後をかぐあるとものげてそ 茶度六古田の家来
うしとごりんど 平尾田をあつく無るそ若者 あの者 尾田 殿下命の松若ぐ下奴
あふ仇のあるふ後と殺しまと仔細ハ一向そ〆ませねど
さうぐ下奴のうぐどぐれど松若ぐ式つて左流のうそて去
どりやうけんぐ 殿下 殿下 殿下 殿下 殿下 殿下 殿下 殿下 殿下 殿下
あるう身どもハ宮和者の藩中 浪沢 代 家 人 と 作
う 若 代 下 殿 奴 ぐ 和 ぐ 殿 奴 ぐ 殿 人 拾 る 後 と 変 入 て 首 振 る

疵と負ハせ一のこう疵どぐ又の仇ぐりとあ後ぐこ之の絆
しがさうふんうそ多り初の仕合所ふ唯今息の根ゝ
うめて呉んと為さとろ家来ふ式つて手絆ぐ俺せ
まんとあまぐとて一番りぐいぐ海ぐ多下命い勿論ぐ
後をもあり返ーうく思ひまるぐ刀ふ抜て斬らつせんふ
ぐ為ぐうう 代あ重つ おれふ後ゝふ下命と遣つて
愛厚の武士変ぐあつて面白いぐア板つせん 年尾田
氏の こぐどぐるト 法の通家遠方ハ 知 ゝ と下げて

「是い又爰つて作兵衛もまうさでト奴の藤
太郎と申人と申人ゞ又と交くゝ拳のもおとるげゝ拙者ふ新
て公儀をふもおゝ御滝つうまつる緯稜役のおそゝひ
ゝ御ふ新ゝ入てとをいせもあくぞけとうち掉を「イヤく
そ義い変て徒つゐ夫とも力ゞ接られぞべト扉の身
どもゞ仕せ又武徒も武徒ふ返をるいれゐゐ義
つ傷とうえくりて「おの〳〵那とゞろ〳〵こうけ申
つをいを孤そうふ孫ふ力い接をそゞ那うゝ場面人陳人

で追ふ金い情いとうえくゝる「左稜〳〵「緯徒将と
るふ手ふせるとつふのうゝて米「主人の不忍ゐとゝ
ものゞ。イヤナニ牛尾田氏とゝやゝ要屋も不米とゝ返ふあひ
将徒まで也奈いまて武士ゞを主まんまの氣とゝて也
泥沢とい明米のうゝ也くふ徒ての地太力殺て遣れ
ぬとゝろと紙金ゝて疲ゝ撈員とつゝさ主とよ米ゐつゝ
ゞふおゞゝけつゝ威とうえる渠考ゞさゝ
きふ尚の表ての泥沢い下ぬゐゞゝも見米ゐつゝ

る七郎ぐ又の歌と知るのこと[illegible]
脱ふ老死とまつり又逃[illegible]
わらげて彩く慇懃ふ[illegible]
と言つせそのうへ[illegible]
まび今いたや老[illegible]
返答い爭ふ[illegible]次の巻と續淨て知らん

正史実傳 いろは文庫巻之廿八了

正史実傳 いろは文庫巻之廿九

江戸 為永春水著

第五十七回

金[illegible]れ水へ彩老どもふ施まで過言と言ひ募らせ道ふ
心中忍と合めび今へ彩うとと拘とさざあて泥沈考ふ
うも舞ひ「イヤナニ各位云うべ仏の経まりしてもか文海い
どうれとうに氏うへ老那ふ及ぶ那方遠方の用拵いる
一個とい面仆ど咸恐がうふ蒐らうサ人ト稽

刀鞘に入て後に抜ふ様どう刀の鞘にこしらへつ
きたるとうくるの勇士の刀拵へそのあ身下せ〜宮ふこしらつて
拵ふ〜形勢ふまたい又嘗気とうえ物ぐかうぐと表でれのる
あどわもと二個とあのなどうこうる武士ごもひ我を不対てさん
とひ〜めくと派沢剥して冷笑ひ沢〜丈の知さうへろく
切各位の江加勢と被うる紙のうでもどぎ〜ぬ拙者ぐふ様
と品流ふ入ト強くと我ふ出〜絵方ふさふ命と脱出ふ
今入ふい殊勝と乳の毒ふどうふ処様のふ拵い急北微

磨ふ入ふ新念ふ且ト立財へば〜そのうふ云へ紙でのと
卒まず勝負とふひつふも又とふらうと拵えるせば遠方
自個ふ拵金毛一上一下と放ひふ立ひふ様の切ふい
電光稲妻ふの月須臾雄雄ふ刎ざうしが古田の家
ふて一人と言ふ史へ〜ふのの門雷光石火と
対迎む奴と受頼じうる代ふ拵つ右の脱どうら屋
さきひ。むと扨うと分へて拵ふ刀ふ又光ふの膝の
つぶひと被為せバウントふ作ふ表ふ仕ふうる侍

勢き潔き更とうるよう同体の仏どもいうち殘き心ふ
めかの怖いのごけど今日ふ朋輩と付き合て又遊
きべ死ふあくれば泥沢ゞ伴蕃ありうとおのく及び接連て
りんど世ん度さらう
生あうゞ赤波れ太ようかつくうかこて放蕩ことをあい更ふ
あく
腰をうるうとあく青死のごれ白及の中へ面もふ毛対べうう及ふ
さ
特源接れつ実ふ毛三位ゞ伴るところの所謂神先二刀流の秘術
と美しくくくふた武い朋放からうけ剣又い青と美ふあれば
てあく
長足と落され春美くあうう遊ゞる老い人ども浅原源源と

負ひあくくだうくこと伐倒さまと多勢を斬こくいども
及泥沢ゞ伴蕃も咸さんぐふ付おされ多くい弁知ふ命を落
し逃んとせも宝瓶ふ蓄こと秋及遠処ふ伏潜び命ろうぐ
落延くい一二個ふるぐうけうを出い多勢と敵ひみゞう少減
一間処負ざればうんゞ伴ふ放あびけ近づくもあねば
及ど抜うて鞘ふ収めぬこと弁慶ふ対面されて考こ
ゞくくやに息ある七郎を抱き起こうとくコレ七郎
さも残念ふんであらうゞ体の敵の敵と又く浪沢

大事自己が討とつて其方が恨も晴してやろと存じた健気な心
あららる「ハイ」且那さま有難うござります私はあらが産で
思ひが晴ましたもう思ひ置ことはござりませぬ是が此世の名残
でござりますと「ヤコレ」そんな気の弱い事をいふて居ぬ伜
の息のあるうちはまだ此方の本望を遂させて見ることがある
うかうか心を落さずに気を慥にして待て居よト用意の気
付薬を取出し含ませ様子を窺ひつつ遠方に有ましたる沼
沢が不良の欲に落されながら死も御やかで居らうと襟

がくつろんで引ずりまはり「ヨレ」七助覚えて伜が父の敵沼沢
伴右衛門つらぞ思ひの儘にさいなんで日比の遺恨を晴らせ
がよいトさしつけるまで七助はや片目は見ゆるがまだ余
りの嬉しさにやおや気を忘れて起上り腰なる一刀引抜て
沼沢がのどへのりかかり沼沢伴右衛門が最期もいひ無念
伜が為に縛せられて罪なく命を落されし父の怨と母
の無念今は主人のお情けにて一時に後まで七助が遺恨の
切先受てみよと父を目前に突つきとどめを刺

改為さまを弱き果する涙沢げあり人とも慈悲あるや
頼りふ眼とり見るのこと返まて縛もあるざると七助
施まで罪を懲して狗のあるりを二刀まで巻も
あまとと判つるぬくあるでさるもの供あるつも頂めい
めざく苦しと云がたやと忘絶へ形状ふ忍沈紅やもと
けん倶ふ絶入る七助伝まりてで死しすりけるとれい
ふびん不便と思ひながらも又絶御もあるされば石紙あに
歌の扇投人を殺抜きさ寄せ縛の仔細とあ語り家い

古田の家来あて牛尾田といふのあり影の人と
あやかりの拠る紀次郎あるまつべ宮て宿の接もあんが我も
自利あるもの西へ逆処ふ久〳〵止まざる〳〵ひのあつ紀そ
方どもが迷惑いつまて係もあるべ本玉伊勢の松坂へ
何時ありともまらし出よ宿の家敵ふ〳〵ざるやふ
まらし乱てねさんべしまて七助が死骸とびあるのちと
菊ひつく祈てを地と寄をまして松坂ふ飯ひふ歳
程もなく古田の家ふ思ひげを紀出すありてを家ふ

あらくまや
夜不ものもの
まぎれの分別
ちえび

ちんの丞

級あるべしとうべきあり海の方とりて須臾あちこち
さまよふうち山城の石伏見の里あて又一條の西洞院
その動きと尋ぬるに伏見の里より戸の程をさくもあるぬ
涼茶屋をとえやふ取更て矣の刻五月あまりのこと
なれどまだ月代も出やらで星の光も残るべみて夢の戸
芝端うけつゝ迎り来りし二人連男小柴まだ十七八の茶
髪さえ刺う落さぬ弱成歌く笑ふ年如い見ふ二つこの年
坊ゐゝんと名ゐうまど化粧柴まる新立のぞのとまる程

うつ
見ぬ〜義氏如い撞木町の八文字屋と噂まてる揚屋の
抱あて名代漢蓼とあてえやさまと弾多の矣のその中ふて
彩えゝ迎とその名を呼ぶ見ゐ弱ふ見ゐ源て五ゝ源くる
伝ふ又芝ゞ見伝細あて今竜廓を矣蔵ゐ返知へい
さまよひ来りしゐ「形さん」「丑」「ヨヤさ」乳のない迎辞
とあてサ物ごらう子工「形」乳のある返辞も知ゐくしゐ
ゐひう矣で乳ゐふとりふのごりのと「矣ゞ」乳ゐのと
そんゐふ乳ごゐいのゝ。迎ヨ芝ごとお矣のりのと乳ゐふ

死でお呉とこの者まるいうらうお茶いらつまでの長命とこと
又何処どこの女房元と逢いして多分落胆とおもるその日私
きいもこんな落胆者とも知らるいで実と尽くこのご不潤法ど
うら絵方ごろいとおきこめて猫で死ぬこサ「コレサ何もそんなふ
猫どもこそ筋もあるめんどやアねくら式身ごうて実い大りすと
抱へさ猫どこう死ぶいこと式ともねくけれどもふとうこさこう
お茶の所人ひそでも何花の縁ごう知らいるうげも
ねく式身のゆうる者さ信かいらくあて長ぶうくその心わざ

きれて敬心と差つて居うあちふ田舎のあとやうこお茶と長五
して連て猫とのうに情うつても猫でも今づでいけわれぞ
しあん必ずふも五年ふも尺と果てこそれお茶ごいふあやア迷由連れ
ぶくちうゆうこ生て長ても糸いこがいうこ死で使茶こつき
つめさ見懐の花ふそんふくこ花ひとろこ教ふ者の二人一処
ふ情死と死のうすとも余所ふて云かうとの云蒙の言く
づめ人目の多い廓のうちと連出て来てこそこの茶
ぶ情うつて出来るうめうる「教うお吉ひごと教ううこと

おかけ丑どもゑんのお附合の情死ぢゃあるまう張えくる
ゐいとおかうつサ「る藤ゐと張り人附合ふ今ら捨られて
嬉るものゝ「夫ゐ結うざゝ丑そくて仰知まで逢てお出
のざう私きゃアきくうつて風邪でも引と困るふ上是と知ろ
さら出入出処で来まづ位うつうけ「お茶もいまら
ねへとと云つてものざ今死ぬのふ風邪ぐひが仰ざらう
「アヤホンニと茶ぐ付ゐんざョ夫ぢゃお茶えい実ふ死ぬ気
久浮瓶嬉や利ぢでさる情死い表気なゐうざふ形う

やつてゐるとあんまり家の利とめでもないわく「ざう是
死ぬのざものと思ふ気も出ぬ者もつてものうる氏振ゐとを
云つて居るうちふ廓の遊ふでもえんつうつて死をるつ
て投恥ぢまぐ幸ふ月も出ぬ人里えるれと氏投中
表等ぐ丁度場ふも宜いお茶是ぢいひのざのト多人
まて女い用ぐと「そんゐう新えん私と先ん殺してお共
のう人「お茶と殺ゐとその振先で逝ふ氏身も死ん是
振サ「果敢ゐいて氏い人ゆうざ来世と先ん往つと

なう夫婦になつてお暮しなされ子様「それぢやアいはれぬぞと
知らせたれども一つ蓮の新世帯二人和合よく暮しける
から夫をせめての楽しみにお念仏でも多分唱へ「それから
新しい此世では是が互ひの縁のはしなりし宜く執なせて下
寄添へば男も未練に引寄て須叟潤ふくまるるが縁
てこれ果ぬと新しき悪い家と心を定め互ひに叉をもらつて抜
あらし既に新らしよとつくるは最も危うき事なりけり

第五十八回

徳ある新左も又縁ありて跡つけ来りし荒津子だはしる人
一家に厩を出「受取者をえ付るぞ女は大事の恋抱
どうぞ怪我をさせてはなるまい「ヲヽ然うござりますとも
何でも女は引さらつて野郎は夜でおちあろ「ナニ野郎
じやアねへ萬事がおらア「エヽそんならそれ何様でも宜いやア
逃さねへやうに用心しろと太物一反に丸うこぼれ巻ゐ
ながらも新しく悪い女を後ろに囲ひ「アヽモシ皆さんその
お披露は極楽くは何もでござりますてが板ないはば今流

推るのをごぞかまんくらの手かん通りなさつて下さい
き〳〵と云ふ素丁雅收ゞ業もいろ〳〵癖をして新ふ仙食おい
ふそく素元ゞ大枝の金を出して拾へて金貨拍と係ふ
揚ける玩物ふさまちやア遠方の隠ゞ千あげらァにの五
のと面仆ゞ女と元返しとうへで這收い出入あめあげろ
トのふより速く立かりおの〳〵推と掉あげておまくめんと
ちる物ひふ形〻巫も今夏ふ褥をめつてるゞひるとも
夏入かゝとめふあぞちやけうへふ徐術る〳〵死ぬ程ひと

見懐ちて拾ふる又戦ひゝめや須更戦ふその間ふろ
ふ恋ふ濱蓑と二人の男ゞ引ふぎ雲と霞と弦ふん
ふぞ夏ちていと形〻巫ゞあせると結ふ二人ゞあ〳〵隅つ
茶後よりお迎推と夏横ゞ向腸ちゝいと病状ふ撞と
働ふて形〻巫と巫と表金報ふ秋もあら清ふ考ゞ春中扇先
きらひゝ推ふ拾ふまよとお紐ふ憐むべ〳〵形〻巫ふ賢い
ざんぞら衣新さふ咸ゞ〳〵ふ彼らまて今拾くふて脱ふ
ちや拾殺さんとせ〳〵ふふ人あり〳〵一個の武士

那織大小ふとやうふ所中ふ面と白めども紙しうざる
風俗ゑるぶ携へ来り挑灯ふて試みうさるとうるもの
やの仔細のあれどもや「無者共俵てと声をけて挑灯行をふ
別て入を先ふ進こし荒漢子のおうる指と奪ひ取り急
挑灯処へ行ふ残る二人の強者ーがまりがむしゃのふ
続き来れると指うと俵をけん右たよりおてかるを那武士
ふれこもせぬ須臾あらふその間ふ二人も指とうち落
さうし教えらまと場りわそ今からぐ逃ぐくふどそぐも

おまう一人の漢ふも御ふして遠ひ紀去ぶけふまとやふ入
けん俱ふその場を発去をけける伴の武士三人とと死絶ふ
逃指つ遠方ふ飛び〜飛ふ逃とうすけ紀しつらうまび
飛ふ逃いふふ残ひげ「何ふのお方ふどんでまを丸が
危いところとお救ひ下さいましさお礼い様ふ入されま
せん逃もまでい居らまませぬ私の身のう人友は悪類ど
ふ出来ままでまいぶせあて参るふのお名前でも承つて置
とうどぶうまて「十二月 見者のことを礼と交る伏るふひが

おなじの色の薄色のふくんだ名をつけさせうせもうせ
自己い伝えの系譜を剣術の師匠と仰せられて
れ下二刀を差しまして大きなる浪人者ごうかなる
心きをひとなさるぬぐ笠をヨウンれいまぐおれいの大物を
れをの今のあぐら色ゆまア一新の振いのとぐ「ハイ
おなじの新りまして空の面目もないとぐあるまんが
伝切の任せ一番りの出まいもう養私いはの
方の浪人者で祖思彩ら出とまうを出箱振浪く

殺しまもの深い色ことがあのてのとぐあるまいてが月外
ひ地ふ乗りまして立ちとうと接木所の演義とのの拵
の体へ変ひそのさげ運の尽渠が実義の拵ぐて分の
大きなもらち忘れ紋の金銀の紋もぬぐきひ拵まして表
立ての演義を逃まるもうふるうきぐしふ近江田舎の
大変あて接伝紺義とのの者ぐかの演義を分変のお後
義の那方へ変出されて生ての長ないと如ぐ見抜変と受
ての伝へも引まるその心底ぐ氏分の男ぐ一知ふ死るふと

約束をしてあの今身見まで思ひ出て情死を遂んと致さ
ところ廓の遣手ふの兵分らまと云甲斐なくもお腕の悪さ
お殺さるんとあさましきことを思ふのお新で私の命ひとつ
い助かるまいさぞ連ゆらまて濱菱が必や組義を殺して
あらうと彼う言ふうちも心ぞせ死まんお稚い辞ふ尽されて
ませんゲ私い此紙ふ廓へ参つて今一度濱菱ふ對面致し
殺さるとも楽と一処白痴者とも言て
思ひ切ませうぶかるまぞお禁ふ下さるるトいふより速く身を

紀ー組出さんとする組ふ 二刀分 ハアコレ此く彩く亜どのとやら
お前いきつふ九逆上てござるやうもそぎ位身ぶお月コをする
おぶあるうまア落ちて見てとうんさのしやいト懐ふせー紙
一通丸出つて手ふ渡ー挑灯の火をさー寄まび彩く亜も
仏いせけど居とも言つまとぞその紙のまづ上書成濱ト
せび組義さるまいる濱菱よりト思めてるふ前とかとふけ
彩これ 見い濱菱の自筆ふ和遠ござるまいんゲ何の振して実ふの
二刀 ハテまア何であらうとも中を濱を出後あるゲ宜ひト言

艶香と拾兵
牛尾田袖吾
を救ふ
うんど

左仁の丞

りまて遠方に不審なるゝ方に抜き濱むその文面

さて為ざいまゝ男事だろうもとりゝ抜き
先のゞ出ぐんの為ゝ
所作ゆて沙汰まを花の口せ話ともるされ下されい
まとち如ゝ諸ゝひに方んのわど那主
ゆうふ出うまゝくゝ去なゝそのゆも
ゆゝ様所の事 教る兄義兄合ふん

よゝ出つゞ事い為ゝ人合ゝ汚最 私ゝ為の方へ
為りいゝて家出 出ゞ糸ちゞひのゆうふのゆせ
為りい人るまゞ為やゞの為うるゆを教ん事も
文方ゞゝ文者今有情兄教一ひと中あらく
廊のうち我連出ゝまいい物糸あいまゝ深くゝ外
北平あうふ出汚文私とい救ひられかの人
ゝのう我いう根ともかゝゞけ下されいゝ糸ゞく
連深ひりゝあ心の為りるゝ又かの人あ

来線のあいとの私の命を生へ出ふも月ふ
絶えて簡紙おいうり秀岡のぶらひ絶ふ
さて偽りふ人数を人べ行れ恋を人べ
隠い市月田しあるくに偽ひゃとりて
めでたし

横しま
長形様
元禄十八乙巳ノ十八

ト讀むとう悔り私ん紀へを撥と立墨「モとの
みと書ふ伝の振て山和村のでどぎあまて「イヤ十三紙ふ
仔細ものいひ出身ぶ逆処へ来る途中でそのもの拾ふと
その一巻封じぶ切て振さ方ふ私ともるく抜ひてえ
まび深いとこのそ又云りえぞ知ぶぞの人でいあるぶ
初気の毒なるものであると思ひるぶふ来かりそうれば
おふ不の強弓の山振ふとうふ変と思の友兵ごもを
逃ひ退けて仔細と問へべ出みの名前ふ身合する

あふ文で口説を入さのサトゆうり忍泥棒らく出い目
色と契人て立あり又強出さ人とする袖と再びもつう
と引とも「二カ」とやや美面い物数く徒ろしやる「ハテ知れ
とゆう此分とゞ施まで白痴ふせのこころ殺さんとまで
項う〳〵濱菱生て立て男ゞ立ゑ禁えるさるい情
ふ仇てかくつて蛇こふ見ひまもてコレうん通ーてト言ひ
つて振離さんと分とゆもゞけど抱きもくめて初ろさゞん
「三カ」イヤ〳〵文の君ゆ強い強ふ文つ〳〵心とあつあて

ゆ文つ〳〵ゆい意ゆ強女い意ゆ強ゆと歌さゞ裏強の
あ意文と〳〵ゆつ〳〵放ゞこと歌さるのい遠方の不見
れ此濱菱とらいゞ愛で歌ゆとゆ強ゆ十分情い
仕方ゞゞ今此女とゆふけさゝを後ゑい時ゆうゞお
茶ゆお茶いゆゞゞゆ宮ゆて親ゞゆあゞゆあらう人
と殺せゞ分ゆ殺さゝとお茶ふ凶事でゆあつさ此ふい
親ゞの欲さいゞのゆうゞあらう強ふ異和ゆいれゞ
ゆのゆ今ゆあるこのお凶強らゝてゆえれゞ知ゆけて大

主人のさとをねたみうらみ殺。ハテ大丈夫と思ふる者ゞ一人の女ゆゑ心を乱し命を捨るゆうるゝでの男ゝ云ふまじきを女と殺して男と云ること分と全うして左成慢へ生の男と云るのとぞ〳〵ゞ男ゞ云であらう是い男の云て どゝろゞ迷ふでいあるまじうト言いうて実もと彩ん のうゝ悪いそゞめて美の美ゝうるゞく忙然うて居うける

正史実傳いろは文庫巻之廿九了

正史実傳いろは文庫巻之三十

江戸　為永春水著

第五十九回

新うゝ恋い二刀女の縁めふそのを恨ひて須更 首と金ゝるのゝ様もあゝで居うしゞ蛇へそのゝゞを ゝゝゝとあゞりゝるゞゝふ歌宮成あゝゝあ一ふのゝゝと 次の山縁ゝ新うれどそゞめて逢うゝ私人駅ふも猪つゝ 出教列逆ひの雲も晴まゝゝ実私の又駅い人をふかゝ

つて非業の最期をその業ゲ討たるを留板ふ源義経を
うち寛ふ義経の郎等をひそかふ
[illegible]人不実なる如と知るも祝の[illegible]念を余ふ
[illegible]ら命まで渠ゲを愛ふ[illegible]ら[illegible]て歌されたるのも祝
の男ゲくまで純つて性根でいなりく歌の如くて対
あわまでべきやうもの丈のみなるで廓うう歌さるとて不せ
演菱と盗み出さあるまべ迷も通るまあ迷才の汚名
[illegible]て刑厚ときけんうせめて最期い武士らしく切腹

なるべ系ゲ考ゲ[illegible]をつういえ通してト言ふまい
迷く刑ゲううげ廃ふ自害とうあるあぞ「アヽコ」ゲと
形ゲ亜どの丈もやうふ伝遠ひ。ハテ何方と言べしや[illegible]
[illegible]い盗み出すとも捨つて拠ゲて廓の方とゲ
お弟の牙技の出来るやうふ及びぞるゲうその時あ[illegible]才の
[illegible]流て逃よやう又見まぞの非と悔み切腹せんと頃
武士そのおゲるゲ無も討てやう今死ぬ命をゲらくて
[illegible]の刑と思ゲきゲべ続て歌を対おわせ本意を

遠くその時不今の汚名い悪地消やう無いるを言
つぬらう以分ぞ美又不就なせと説論されて彩々
悪いのよく迷ひ晴うけん古改と指つけて「陪」
屋い伝切はうくい伯るもの表の作ふまこぐひませう
とい言ふりの甲変ない私力ともも役ともも先おりふい
変ぞう今いつんで絵のるの釈の実名歌の表名
宮い間抜と言ワんとまるとと二刀毎いあ禁め「イヤ」
変も心沼遠ひ大約大るとかくと老ぐ歌の表名と放心

敵心とに外まるい無名ふ表はい身いて自然ぞい せるぐ
強ふふも言ふ塾ふ耳美はるぐ余所く減て歌ふでも和
らまて時ふい分の祝ひとるるい必実兵支のこのるでいるく
お茶い歌と付まで今いるう〳〵及ぶまの新う白地ふ云
つまる〳〵心ふ陸るう知うないぐはい身い新ぐ猛い表ありの
まる〳〵ふ言ひまもぐ最茶おまへぐ悪表ごるもと新ひふなされと
地振るでい実礼ぐうまぐ〳〵ま弱ひ今ふも歌ふ分
まるるる悪も向ふふ脚先力と放るるめぐあるで

然るに其の御ふ道しるべ者であること迚も
紛い無きことなれども何まで
やうざけまごとの式者をかの者こそいと言いしやつと辯ず
あまべ今ろろ式者の西へ来て一年俄行とあてうんるせへ
お茶も歌と紛れとの人一命で茶と出し式者もそれで
教へろろ天晴を利ふるでおらう文まで不ふあげと
うへでい歌の赤名も窓ふ変て紛せてをぜる時茶も
あらう何と然うでいあるまいろト言ふふつよう歌伏

あて利ろ出いその湯ふて恵さる所者の治とろ
二刀安ふ体いまて伏うんの里へ乗れける
結て浸二刀安い撞木衛の廓るかの八文字屋の
主と振き拾ひし女を徒扶ふて稚こと掛合つ少
しの金さへ与せしべ今度の騒動い浸菱が
巧なるとの白ふ合ろう渠い横浜借売ろう
那教ようして連らま仕き深く稚まて
字屋ようえ出て主者の代とろひの侠ふ掛合つて

ちうもうとめへ新らしく恋ふい仕細もなく縛捕役ふ渡し
そを結びまゝ濱菱母そどもの紙い新らしく恋ゞ若名姿
ふ心遣ひて伝実味び与へ名ゞ方ふ表ふ表裏尽くしてゆう
ふあゝねど奉見多情の淫婦なるゆゑ新らしく恋ふ
秋風のまゝそゝゝと立しかの紺義ゞ若き者ゆえ
艶流れの女男振の又情うゝ名ゞ名くるふ渠い女へ
金打ふて既ふその身と交出て妻ふ做んと言ふふ
ちう新らしく恋ゞ新たふなりしゞ見まゝ紀律もれうかゝて

深く契りゝ中なれば今更那方へ交出さるゝて変
出ゝ者ふまるゝゝ恭行なることなさんも知まじと
女の淺い巧ちうり新らしのごくい做ゝるなり結れども
新らしく恋い二刀ふ救ふて料ゝ中ふ殺るず
そ身い横侍のゝふいゝ縛まゝしも出され縛
皆画隙ふいなりしゞ紺義ゞ金を出て身の代金を
償ひゝ中名ふ妻なりふ女婦となり新らしへの義理
を中入らざる中ふなりしゞ須臾い栄耀の上ゝて

とん蔵

すゝびー

彼悼らぞ著せ〜ぶ紙箱と云へる者い放逸不拘の
白痴者みて祝の儀ふ〜〜早晩の程ふ〜
つ〜ぶ〜〜涙〜首もまわ〜ぬ備金ふ淦方なくやるふけん
涙菱ひとりとを亟去みて或歩出奔者ちうび涙
菱い兵途方ふくまと倣ちべきゆうもあるぎれば是よう
さるようひ出せ〜ふ分うちふ宜うぬ種ねの義〜て
を嗅きさと後ぐとけまべ彼〜て例へも著せつけねば
彼ふ袖元とるうさぐ〜しが果い物とろるうふけん後る

亟と知〜ぞ〜〜ん遠い老浸のお後うるう
慈てまと勢〜亟い彼元の里ふ〜〜ぶう日歩稼古ふ
由所ふ〜〜その間ふい家門のるも若者代ふ〜〜〜
或い師匠の紙ふも出又委屈の元次とも〜て最まるやうふ
車へ〜べ二刀秋も渠が心の殊猪ふると未使ふ〜ひ心と尽〜て
教ゆる程ふ遠方も倣物ふ島うるけまべ〜ぶ〜一稔〜〜
ぞるふ月ふ立ぞう上遊〜て今い数ふ出金とるるれ
ぶ元らぶと師匠も出ひとの分も自ら牧母〜〜名

へら紙ふうけるが折ものも私の初旬二月毎の武具ハ
まうり家新書物のさぐひまで歩行するとて丸ひつげと
丸収めんと仮しうるこれ書物の名ふ様ら紙の
猿の切ふ歳し紙ふ歳ひまで尾田を様とのこ上書
のもてあるふを形を歩い心の程ふ名ひ食るべりや
あうけんものとぞうふ猿きてぶ牡丹紙ぞうまるべ遠
方の美の食紙ふも那方の長彼の様紙ふ伴の名茶を
紙せ一反古の義様ともるくあひしべのようくあつて紙う

ふく折ふ仮ふておるてやうふ千ふる名ものと考えんであるる
お様とのへるトの女ふ射ひ「コウ」お様どん義ふ様ふものと文く
やうぐが反ふ書てある牛尾田を名ふ人ふ何の人ぐう
「知ってる人ト問いまてト女ふ次出「ふくお茶さんもの方と
どこんト尾寿知ふいのふ人ふ長まておぐまふ「コレサ」とんふ笑つちゃ
訳ぐ分解ふい私ーやァ名ひ様ふ門へまさりのと知らふい
ちぐ名ぐらうしやァふいう「ふる様様ぐさるエとんふ数へ
逃ろうら何をお撥ろう「アレ来ふあ出るうふ

さんざ長るゝ遠方まアア長ふ乃まをう「ヨヒ」

京地の悪いうと言いなのを言つてお少せョ更じゃ

此祝ばでもあるのろ子「なア」「アレサ気と様せぞふ

参うのふぶ生つる本統と教へてお長ぐと遠方繕るいる

まで「おゝ」すゝ憐そうぐ子エ実の部へ老ぶ長れさ衣の仏弟の

お名サ「エ」そんるゝ那先生ぶ「ヨヤまアひとい怕そうあ

ふうぐ子エ「ナニ」怕りもあるいぶあんまり今のお衣と先遠

つて長るゝサお弟いうゝ衣のお門ふ久ゝ長るとのふ

ものぐ全術先生い長ゝ遠知ふお在ふさるのろまとい

化ゝ引「ヒト」戦ゝてお出ふまつとのあうふ伏ゝる「ナニ」長れ

今でい化浪人おべゝとけまども弟ゝい衣田の出乳来で

伊勢の松坂ふお在ふまつと時分ふいこ百石に成ら放

て立流ふお武家さふサ「エ」「アレまと怕やゝ人間ゝまエお

弟えんぐ怕ゝまさるこびふ私の胸まぐぎゝゝとてゝら

ふのヨ「ナニ」怕りもあるのぐあんまり長ひぐけるいりのと

「怕ゝ長ひぐけるいのぐ」「エ」ノウ更ぐまこ百石もお長ゝ

さぶらうなんぞとんなふに浪人なまつさうらサ「丈でもいさ
さるいお剣術ばかりをしてお身なぞ沢山あるさうら今でも
不自由いないイヤそうに人を義理源い依據なお方さうら
私なんぞも私扱うう這処までお供をして来ているまぐらふ
お勧めまうして居るイヤ「なる程支度やア先生の出身合を
宜く知つて居なさる筈ぐそこ処でまア那先生に剣術お
おいでい寓ふ名人でお在なさるケあいい人仁義の源い方ぐ
ろう是まで人と争つさうい事剣で伐合ばつさうなまつさ

いるまいるまいる「イヤ上手ありませう「エヤ又物つまい
出発ぐジョ「ハニモウ物うまそる礼きひいるいうう此ておやせョ
そやアまア俗と何処でそんなとぐあつさのぐる「そうく
い言いまるいぐるまぐ浪人なきうるい系うさあるの
湯治ふか出なまつさおばりゲけ抱ない義理合で宮
和尚系の出家来とやらどあいの社系で大そう大
勝お殺しなまつさとぐありまもトサ「エそうく「ヨキまア
何根なまつさのぐ人物ばりぐ歩んぐさ必つつう今後い新の

色まを換くさうくゑ月ゑ用と一ぺい物つてそてまうさう
振つ巻ハ何の表何ごらうるエお茶えんゑ物ゝとまること
何ごろ氣味ゲ悪くなるヨト言ゑまて遠方ハ必づき「アハくく
ナラく私ハ物ゑ氣性でそんゑ物ゝと受くこと自分ゲ欲合
ふう殺されでもまるゆうゑ伝物ふゑつてゑうゑハくゑんさ
ゑと根岡をして行分物ゲ遅くゑつと「ホンニ私も物
しふうゑまて悪物の表ゲ必ずもちゑつと教サ家ゑう
かとこれ七ごらうらうらお教鹿の仕度でもせぬでゐるまゑ

「そそゆア宝ひゲお格さん私ゲこんゑと殺ゆさこんゑ先
生ゑハ沙法ゑすゲョ「そくくそそゆアお和ゲョ見ゑさゑハ
ゑまて見崖業ゲと私ゲ先ゑ物ゑて二刀毎ゲ愛「ハ
私ゑ西ト呼び立らくゑハ殺ゑて。ペイトごうゑハ身を死
その使悪ゑ毛生く

第六十四

「先生ゑハ長ゑ物ゑ用でどゑゑまそう

ト言ひまして這ッ死二刀鞘ハ鞘の裡ふて柔を捉て屋
さもしが二刀「ヲヽ私の方ッ出ッ行の死殺めで死ぬ者が
ちらう此身も無体ッ者とそうくい居るぶ者る者ね
ばあつて今まで机ふかうく居さう強く退屈ふしと
ところ体釜の奏者ぶ方ッ自抜で喋で居る
ぶ体も柔居ハ抜ふ抜ふ抜ふ抜と一抜やらるいう
「ヘイ変い抜ようを通ッどざおまして言ふうち二刀
安ハ柔て立絡う二刀「さう〳〵私ッ「イエまア先生
今一抜二刀「イヤ此身ハ寄う自抜で奏多喋ぶう「先
抜ふう抜裁仕ッまして抜ぶ抜お抜でハ居ま入まして
ッ抜様ふ抜抜金でどざおまして二刀「抜の抜ぶ次ふ抜
う一抜「イエ沢ふのでッ死まして二刀「抜ふうふ抜で出ッハ
抜の抜ぶまざふう〳〵片分ふくまの「ヘイ抜書抜ふお抜抜の抜
ハ荒場抜抜あまして抜ぶか武抜の方ハ先生ふ荒ひまして抜ハ
抜と抜まうねまんやうでる抜ひまして抜ふ二刀「ヲヽそれハ
大抜ふ抜上ッ抜ふ抜ふ抜望日ハ抜抜抜抜片分抜ふ

今日は家内で休むが宜しうござ〳〵候へ共
きて私なぞの目あれるゝ〳〵及びませんが生い立ち弱
らしい私を出かけで入まをする〳〵
あいが好で買集めこゝろで今でい遊ぶて私は
なるノサ私も書物が好きゝ〳〵でも貧をしらうえ
るが宜い〳〵〳〵イ私しのい育のうえ教きこゝ〳〵で
どざるまをが何事そのうち拙者が教へしいのでど
どざるまをに二カ〳〵〳〵早腕でも出てそうせ人年の好き

のい何より宜いるゝざる意角今の世い武士と言へば
武芸ふむうり心を入まるが文学ゝ〳〵ゝ義理ふ暗い
ものサ何でもさむらひいの子供のうちふ読書をゝ学ばせて
文うゝ武の道を修行させるでるゝゝい役ふ立ゝるい知う
ものゝゝい失礼ざが御ゝ私い全新虚弱な生付で長る
さるうゝ武術より文学の方が好きでお育ざらう
保氏稚ゝの出精で余程稽古がまのつゝ積みざ
うゝ家内ゝの苦ゝこゝ氏も安心して那方ここで

むすめ
おすゞ

手紙書
いろは十へん下ゝ

立派ふ遠らまるやうみてきろうまるそのえで
俳諧とまるゞ五ひト言ハまてハット俳句ハ思ハ物のかりひ
けん平伏て須臾涙ふくそのこハ言ひるとあげれねば
二カ月思いあくう気の弱い物も浅ない交てない時長さ人
未まだ半分遠らまるうくよく考ふまいぞヨ「イヤ
左様なるいかゝもぞんじませんゞ物振りハ深い仏縁
でうつい仮初のとうゝて簡振ふ所生の盟約と
強ひ文祖まぞふやめて不さいまんうとねまんと

寅ふ涙ゞこぞまとまそ文ふ強ても私のふゞいない生
付必先生のお心でハ歯痒ひ事ふ必ゞ右まそう「イヤ
ナニ俳令虚弱な生付でも俳諧の功ゞうんざうんで不動
心ゞ右ゞんと居まぞんな大敵ふ捕ゞこまれても怕とも
そるゞ思ゞやアないノサ文ゞうら物でも出精ゞ肝要と
申「文でハ俳諧ゞつこまそと然うのふ抜てぞゞあまん
うゞエそのお心ふ強て序みゞゞ俳ひまそゞ名人上
なりまそても不意と付きまうてハ悟ひまんまいうと思

まもなく先生なるぞのやうに武器をおもふ入切つてゐた
振るもないあてぶるませうろ「方」「さはなるんそのい
るりくひふ入でゐ藝といふ藝といふのを
ものを由郎うろ死るるサ然うゐと言つて今ふも人が
切葱らうろとひやくゐつて用心をして居さうといつて
るりくつぐくあでいるいふとを脇下ふ落付て天地と我と
おのづ心ふるつて居まびすぶ分の由郎もるいうるるりく
ふを言を付うとしてもいまろれでいるいチ長ぶ今言うと

ふ動心の場ふぶを知までふあつてうるのでい利を
るるうら伝のでも俄ダ肝心ぶト出のうちふ次の方より
下女のお拵ぶ新を出くまぶ「見れさるは振ぶ立うぶの
まもそ二ア「ヲ仕度ぶ立ひるら変ふ喰ふう新そ恵も
級度へ待つて休息をまるぶのひトまらまてへイ新そ恵い
帳を報知つてそ終ふ猪心の方へと立つて待く徳て
又二刀安い教食日脱ふ果さるふ今雪いまんぶの書
恵の拵書残つまて居ろうと字一果ん与ふあぞ甲

秋の秋より机かゝり折ふし残暑の去やらぬ八月末頃
ゆくさき入るまゝ夏の供をして両手もくらぐ掾の口より
仕うけさる故きり火もたやゝ絶こゝ朔うも紙くゝ教文て
千年ふるそゞく宮の声茅茸の家ふ消残る秋の雲も
新蔵て美禁さの蘭の高き枝きを天さ夫の刻と
二刀毎へ僅ふて書絞らんとする独ふ手の運びもいと
遅く更ふ脇念もあるざるところへ庵の切戸とち寄て
兎角ひふひそゝと思ひ寄る一個の面若慶面

代帽ふ黒装束稜ふたゞさゝつゝ白ふ一條の紐
と引提そのさゞ分稚くも扮るゞ掾の傍ふ復さそ
裡の掾子と窺ひ乗しゞ打うう月ハ雲ふ入て世辺ふ
暗くなりしうゞ時分いよゝやゝ引けん掾り窺ふ点ぜ
きつゝ一下るの裡へ掾ぬさ様ひさゞなして二刀鞘ぶ机
ふかりて代るもの死服後目づけて実出て殘先ゝひ
寄うざるとゞるとども遠ハ名ふあふ武乃の達人とゞ
書ゞ
今知りけん忽地ひらりと身をかゝせば敵ハ行

向ふへ行燈をつしと突つらぬきさつぐこと
ゆり消を灯火仕損じうと面若い雪ふ高途まり
つと突死逃方い文ふ動く解ふく穂先の考うふ右尾
と再こ回角をひゝき傷ふ毒し疑力とゑよう迷く
接合せ文つ流しつ戦へど敵い北羽玉の雪ふれい
妻所傷員ゆ判ざりけり

正史
実傳

いろは文庫巻之三十ろ